

平成27年度病害虫発生予察特殊報第1号

平成27年10月1日
鳥取県病害虫防除所

- 1 病害虫名 トルコギキョウえそ輪紋病
- 2 病原 アイリスイエロースポットウイルス
(*Iris yellow spot virus* : I Y S V)
- 3 発生作物 トルコギキョウ
- 4 発生地域 県西部、県中部

5 発生確認の経過

平成27年7月上旬、県西部のトルコギキョウほ場において、葉にえそ斑点及び、えそ輪紋症状が発生した。鳥取県園芸試験場においてRT-PCR法によるウイルス検定を実施したところ、トルコギキョウの罹病葉から *Iris yellow spot virus* (I Y S V) が検出され、本県のトルコギキョウではこれまで未発生のトルコギキョウえそ輪紋病であることが判明した。また、県中部のトルコギキョウでも同様の発生が確認された。

I Y S Vによる病害は、本県では平成20年にラッキョウにおいて発生が確認されている。その他、全国33都府県でタマネギ、ネギ、ニラ等で発生が報告されている。

6 病徴

本ウイルスによるトルコギキョウでの主な病徴は、葉でのえそ斑点やえそ輪紋、茎のえそ条斑であり、病徴が激しい場合は株が枯死する。その他に、葉の湾曲や黄化、花卉の斑入り、株の萎縮等も報告されている。

7 伝染ウイルスの特徴

(1) 伝搬方法

本ウイルスは、トスポウイルス属に属し、ネギアザミウマにより伝搬される。ネギアザミウマは、幼虫時に感染植物を吸汁することによって本ウイルスを獲得し、終生伝搬能力を保持するが、経卵伝染はしない。本ウイルスは種子伝染、土壌伝染はせず、管理作業による汁液伝染の可能性は低いとされている。

(2) 宿主範囲

現在までに18科40種以上の植物で感染が報告されている(表1)。

8 ネギアザミウマの生態

世界中に分布し、日本においても広く分布する。体長は1.1~1.6mm。体色は黄色から褐色。本種の発育は非常に早く、産卵された卵は20℃では20日、25℃では16~17日で成虫となる。主として成虫で越冬し、5月以降に増加する。年に10回以上世代を繰り返す、高温少雨の気象条件で多発生となる。

9 防除対策

- (1) 媒介虫となるネギアザミウマの発生動向を把握し、発生初期からの防除に努める(表2)。
- (2) 周辺にネギアザミウマの寄主となる作物を植えない。もし、近くに寄主となる作物(ネギ、ラッキョウ、ニンジン、ホウレンソウ、ユリ、ブロッコリーなど)がある場合にはこれらの作物でもネギアザミウマの防除に努める。
- (3) ほ場内外の雑草はネギアザミウマの発生源となる可能性があるため、除草に努める。
- (4) 罹病株は伝染源になるので、見つけ次第抜き取り、ほ場外に持ち出して土壌中に埋没処分する。また、発病残渣もほ場外で同様に処分する。
- (5) 施設栽培においては、開口部を寒冷紗や防虫網(目合い0.6mm以下)で被覆、ネギアザミウマの侵入を防ぐ。また、UVカットフィルムの利用もネギアザミウマの侵入防止に有効であるが、濃色品種では花色発現に影響する可能性があるので注意する。



写真1 トルコギキョウでの症状



写真2 葉の症状



写真3 ネギアザミウマ

左：雄

右：雌

表1 IYSVの感染が報告されている主な植物

科名	植物名
リンドウ科	トルコギキョウ
ユリ科	ネギ、タマネギ、ニラ、ラッキョウ、ニンニク、テッポウユリ
アルストロメリア科	アルストロメリア
ヒユ科	センニチコウ
アカザ科	ハウレンソウ
アブラナ科	ダイコン、ハクサイ、ブロッコリー、ミズナ
セリ科	ニンジン
スマレ科	パンジー

表2 トルコギキョウで使用可能な防除薬剤（平成27年9月4日現在）

薬剤名	適用病害虫名	希釈倍数、使用量	使用時期	本剤の使用回数
オルトラン粒剤	アザミウマ類	3～6kg/10a	発生初期	5回以内
オンコル粒剤5	アザミウマ類	6kg/10a	生育期	3回以内
ジェイエース粒剤	アザミウマ類	1株当たり1～2g	発生初期	5回以内
オルトラン水和剤	アザミウマ類	1000～1500倍	発生初期	5回以内
ディアナSC	アザミウマ類	2500～5000倍	発生初期	2回以内
ハチハチフロアブル	アザミウマ類	1000倍	発生初期	4回以内
マラソン乳剤	アザミウマ類	2000～3000倍	発生初期	6回以内
モスピラン顆粒水溶剤	アザミウマ類	2000倍	発生初期	5回以内